

子ども行事の存続と変化のプロセス

—函館七夕行事「ローソクもらい」「タナバタまつり」を事例に—

Process of Change and Persistence Children's Events:
A Case Study of the Hakodate Tanabata Event,
“Rōsoku Morai” and “Tanabata Matsuri”

松館 明

キーワード：子ども行事，七夕，年中行事，行事変遷，人生儀礼

This study considers the Tanabata event in Hakodate, Hokkaido as a case study to analyze the process by which children's events persist. It traces the event's origins and relevant historical transitions to examine changes in its significance through different eras.

The study divides the Hakodate Tanabata into three stages: the regional Tanabata Festival of the Edo period, the child-led Rōsoku Morai (candle begging) of the Meiji period, and the Tanabata Matsuri of the modern era. The event originated in the late 18th century with the Nemuri Nagashi custom and harvest rituals of Honshu. It was the then-largest local festival for adults and children. After the Meiji Restoration, regional festivals declined, but children preserved it as a form of play. This continuation became Rōsoku Morai, which entailed children collecting candles for floats and lanterns. Until the mid-Showa period, children competed to collect the most candles. However, from the 1970s onward, lifestyle changes and fire safety concerns led to the replacement of candles with snacks. Subsequently,

the involvement of schools and adults increased, and the event transformed into the modern Tanabata Matsuri, where children receive treats according to rules.

This study analyzes the changing significance of the event from the dual perspectives of children and adults. For children, the essence of Rōsoku Morai was an opportunity to act autonomously without adult supervision in an atmosphere that permitted mischief. This deviation from daily norms has faded from the modern Tanabata Matsuri. Children instead find enjoyment in efficiently obtaining desirable items while following rules. Adults perceive the event as a rite of passage and a chance to observe the consistent growth of children. However, the opportunity to be creative with handouts has added to the event a new function as a venue for self-expression.

This study concludes that the key to the survival of the event is a shift in adult perception of it away from an annual community event and toward a rite of passage for each child involved. The Tanabata Matsuri thrives today because, in addition to being a rite of passage, it confirms regional identity and allows self-expression. This multi layered structure, the author concludes, is the foundation for its continuity.

目次

はじめに

I 研究史と問題の所在

1 子ども行事研究

2 子どもの七夕行事研究

II 函館七夕行事の起源と「ローソクもらい」の誕生

1 地域概要

2 箱館への七夕行事の流入

- 3 「ローソクもらい」の起源に関する語り
 - Ⅲ 「ローソクもらい」から「タナバタマツリ」へ
 - 1 昭和期以降の行事変遷
 - 2 2010年代の「タナバタマツリ」
 - 3 近年の様子
 - 4 令和6年(2024)の様子
 - Ⅳ 考察
 - 1 函館七夕行事の意義
 - 2 子ども行事の存続と変化のプロセス
- おわりに
- 謝辞
- 注
- 参考文献

はじめに

北海道函館¹⁾には、新暦7月7日の七夕に子どもたち²⁾が地域の家や店をまわり、蠟燭を要求する内容の囃子歌を歌うことで、家や店の大人から菓子などのモノをもらう「タナバタマツリ」といわれる行事が存在する。昭和後期までは本物の蠟燭が集められており、「ローソクもらい」ともいわれた。類似行事は道内各地でみられ、開催時期や囃子歌にこそ地域差が認められるものの、子どもたちが家々を訪ねて蠟燭を要求し、モノをもらうという基本的な内容は共通している。

幼少期を函館で過ごした筆者は、歌を歌い菓子などをもらう「タナバタマツリ」への参加経験があり、囃子歌での要求と実際に得られるモノとの間に生じる矛盾に強い関心を抱いてきた。このような矛盾を内包しながらも、函館の年中行事として現在も盛んに行われていることから、この行事が地域にとって、形を変えてでも存続させるべき重要な子ども行事として認識されていることが分かる。

そこで本稿では、函館七夕行事の起源と変遷を辿ったうえで、行事の意義の変化を明らかにする。また、これを踏まえ、子ども行事が存続していく際に起こる変化のプロセスを検討する。

I 研究史と問題の所在

1 子ども行事研究

これまでの子ども行事研究では、行事の構造や展開、地域における位置づけ等が検討されてきた。本稿で扱う函館七夕行事をはじめ、子どもを主役とする年中行事は全国各地に存在し、その多くが子ども組などの同年齢集団によって担われている。

その起源について柳田國男と竹内利美は、衰退した大人たちの神事や行事にあると指摘する [柳田 2013b (1960) ; 竹内 1957]。大人にとって意味を失った行事を子どもたちが模倣し、自分たちの遊戯へと転化させたとしている。しかし、明治維新以前から続く祭礼や五節句関連の行事は、改暦に伴う廃止の影響も考慮すべきであり、子ども行事が大人の「信仰の衰微」や「存在意義をほとんど失った」ことによって生まれた、と一概にはいえないのではないか。

一方、飯島吉晴は、子供組が担う行事の特徴を挙げ、それらが「非日常的性格をもち、裨祓などの行為でムラ（此の世）の秩序を更新するものであることは認められよう」と述べる [飯島 1991 : 76]。また福田アジオは、行事に参加する子どもの存在自体に注目し、以下のように述べる。

信仰的な意味をもつ年中行事を子どもたちがになうのは、大人たちの関与が後退したからではなく、子どもが神に近い神聖な存在だからである。その神聖な存在に対して、ムラ内の分業として一定の行事を担当させたと解すべきであろう。[福田 1977 : 119]

これらに則ると、大人の世界で必要性のなくなった行事を子どもが引き継

いだのではなく、地域の重要な行事を、神聖性を有する子どもたちが担うことに意義があると捉えることができる。しかし、現代の子ども行事を支える大人たちは、子どもの神聖性を認めているのだろうか。福田の分析視角が、現代社会においても適用可能なのか検討すべきである。

2 子どもの七夕行事研究

これまでの七夕行事の研究では、中国から流入した乞巧奠と日本独自の宗教観念が複雑に絡み合ったことで発展したとされる [川田 2024；史 2023]。なかでも田中宣一は、全国の七夕まつりについて、(1) 牽牛・織女の相会を祝うもの、(2) 芸芸の上達を祈るもの、(3) 農耕儀礼的側面、(4) 子供などによる小屋行事、(5) 水による汚れの穢除、という5つの類型化を行った [田中 1983：169]。また、子どもが主役の七夕行事に焦点を当てた研究として、社会学者の川田耕は、全国の祭りの形態を「練り歩き型」「おこもり型」の2つに分類した [川田 2021：163-168]。本稿で扱う行事は、全国に広くみられる「練り歩き型」として取り上げられ、その由来が東北地方の「ねぶた」にあるとされる。このほか、蛸島直らにより、函館七夕行事は「ロウソクもらい」「ローソクもらい」として各研究で取り上げられ、その起源や実態、地域に根付く理由が検討されてきた [蛸島 1986；小田嶋 1999；山崎 2013]。

しかし、いずれの研究においても、起源を言及する際に用いられている史料『松前紀行』『箱館風俗書 附 函館月次風俗書補拾』には、子どもたちが蠟燭をもらい集めている姿は記録されていない。加えて、これらの史料に記される七夕行事は、山車や囃子がひき出され、老若男女で賑わう地域最大の年中行事であり、現在のように子どもが蠟燭を求めて地域内をまわる姿とは大きく異なっていることから、江戸時代安政期に記録された「七夕祭」と「ローソクもらい」の同一視には慎重さが求められる。また、蛸島による調査が行われた1986年以降も、函館では七夕行事が活発に続けられており、その形態も蠟燭を集める「ローソクもらい」から、菓子などをもらう「タナバタマツリ」へと変化していることから、行事の現在の姿を踏まえたうえで、再考する必要がある。

そこで次章では、江戸期から昭和期の資料を用いて、函館における七夕行事の起源を明らかにしたうえで、「ローソクもらい」の誕生と変遷を辿ることとする。

Ⅱ 函館七夕行事の起源と「ローソクもらい」の誕生

1 地域概要

北海道函館市は、北海道南端に位置し、南に津軽海峡、西に函館湾、東に太平洋と3方面を海に囲まれている。津軽海峡を挟んで本州の青森県と対面する地理的条件から、古くは北前船の寄港地、近代以降は日本の国際貿易港の1つとして発展してきた。

現在の市域は、1922年の市政施行後、1939年に湯川町、1966年に銭亀沢村、1973年に亀田市、2004年に戸井町、恵山町、榎法華村、南茅部町との合併を経ている（函館市、online：R7gaiyou.pdf）。令和6年（2024）7月時点の統計で、世帯数138,835世帯、人口237,790人（函館市、online：tyoubetsuR6.xls）。函館市によると、地区は、函館山の麓に広がる旧市街やJR函館駅が位置する西部地区、特別史跡五稜郭跡を中心に商業施設や教育・文化・スポーツ施設、官公庁施設が集中する中央部地区、函館空港や湯の川温泉街が位置する東央部地区、大型の商業施設や官公庁施設が位置し、近年、住宅地開発が進む北東部地区、商業・工業施設や新興住宅が多く位置する北部地区、旧戸井町・恵山町・榎法華村・南茅部町の区域で構成される東部地区の6つに区分される〔函館市2012〕。

本研究では、「ローソクもらい」または「タナバタマツリ」の習俗が根付く、東部地区を除いた函館市域を対象に調査を行った（図1）。次節からは、江戸期から昭和期の史料に基づき、この地における七夕行事の起源を明らかにしていく。

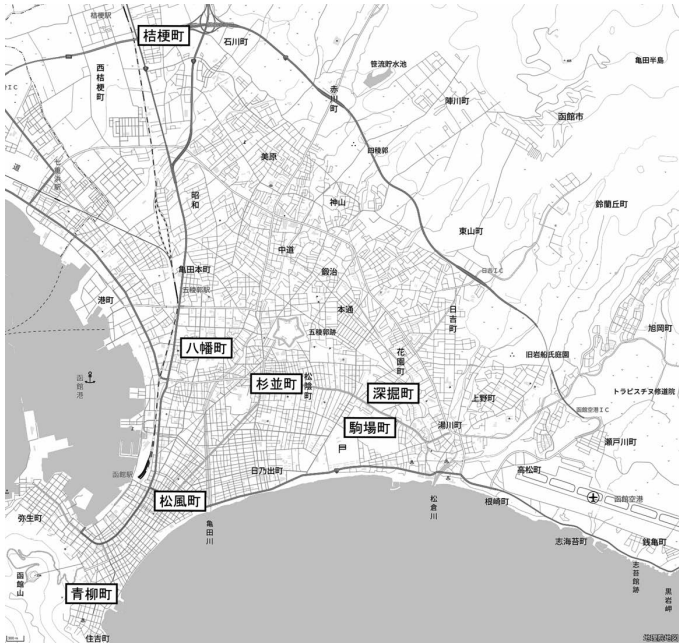


図1 4町村合併前の函館市域と令和6年(2024)調査実施地域
 国土地理院「国土地理院地図(電子国土WEB)」を加工・加筆し筆者作成

2 箱館への七夕行事の流入

先行研究では、函館七夕行事の古い記録として安政年間に記録された『箱館風俗書 附 函館月次風俗書補拾』や『松前紀行』などが用いられてきた〔蛸島 1986; 山崎 2013〕。しかし、それ以前の記録として、菅江真澄による寛政4年(1792)の遊覧記に次のような記述が残されている³⁾。

(前略) つゝみうち笛吹、柳の枝に五色の紙引むすびとり持て、いまだ暮ぬより、ともし火高くさゝけ、豊年豊年とよばふ。又ねむたもなかれよ、豆の葉もとゝまれ、と童あそびしたり。ふりかざし行火ともしに、七夕祭とかいたるに、こたひかざりにまつり、調度明けなば川にながしやるといふはいかにそや、ことなる棚機まつり也。

銀浪きしの柳を折かけにあすの別をおもひわたらん此まつり南部津輕
よりうつりて、七とせ八とせのむかしよりはしまりぬ。さるゆへにや、
いまだ松前福山の島にはあらざりけり。

この記述は『菅江真澄遊覧記』の他箇所にもみられる東北地方の「ねぶた流し」
や「眠流し」の様子と酷似している⁴⁾。このことから、函館七夕行事の起源
は、18世紀後半に本州から流入した夏の睡魔を祓う「眠流し」の習俗にある
と結論づけられる。また、記述中の「豊年豊年」という掛け声から、この頃
の行事は同時に豊作を祈願する予祝儀礼の性格も帯びていたことを示唆して
いる。

時代が下った安政2年(1855)の『箱館風俗書 附 函館月次風俗書補拾』⁵⁾
や函館港開港後に記された『箱館夷人談』には、額燈籠を持った子どもたち
の他に、各家で制作した鮮やかな燈籠飾りの山車とそれを担ぐ若者、笛や太
鼓、三味線を演奏する囃子方が祭りで賑わう市中を練り歩く様子が記されて
いる。これらの記録から、江戸後期の七夕は、大人も子どもも参加する地域
最大の祭礼であったことが分かる。一方、これら明治以前の史料には、子ど
もたちが蠟燭を乞う、所謂「ローソクもらい」に直接つながる記述は見当た
らない。例として、松浦武四郎の嘉永3年(1850)の記録『秘めおくべし』
や安政3年(1856)の『箱館紀行』には、「七夕祭ホウイヤイヤヨ⁶⁾」「某氏
の門人七夕祭ヲ、イヤイヤヨ⁷⁾」といった囃子歌は記録されているものの、
蠟燭を要求する文言は含まれていない。

子どもたちが蠟燭をもらい歩く姿は、時代が大きく下った大正2年(1913)
の『函館毎日新聞』の記事からみられる⁸⁾。そこには、子どもたちが提灯を
手に「ごたん短冊川端柳よ、蠟燭だせだせよださなけや搔ッちやくぞ」と歌
いながら各家をまわる様子が記述されている。

これに加え、『函館新聞』明治19年(1886)の記事に以下のような記述が
ある⁹⁾。

○きう七夕

七夕祭といふハ函館古年中行事の一ツにて維新前後までは市中各町々より孰れも先きを争ひて燈籠の山車を引出し不夜城を現出するかと怪しむばかりの盛んの事なりしが爾後年々この遊戯をするものもなき虚ろ本年は昨日が旧暦の七夕にあたりしので子供達相集て小さき山車を引出したるもの多く其他笹へ種々の短冊などを付け灯燈をてんじたるもの多く大黒町邊は余程賑はしき景況なりし

函館最大の年中行事「七夕祭」は明治以降に衰退し、祭りの主体が大人から、祭礼を遊戯に取り込んだ地域の子どもたちへと移っていった。「ローソクもらい」の習俗は、この遊戯で用いる灯燈の蠟燭を集めることを目的に始まったと推察される。かつて地域祭礼の主催者であった大人たちは、祭りが下火になったことで、祭礼の新たな担い手となった子どもたちへ蠟燭を分け与える後援者へと役割を変えたと考えられる。

3 「ローソクもらい」の起源に関する語り

筆者が令和6年（2024）に実施した聞き取り調査では、前節で述べた文献調査の成果と異なる「ローソクもらい」の起源が複数語られた。それらの多くは、函館で過去に起きた災害や事故の犠牲者を供養するため、蠟燭が必要だったという筋立てをもつ。調査で採集された代表的な語りは以下の通りである。

①大門遊郭の大火¹⁰⁾

大門遊郭¹¹⁾ から火事が起きて大火となり、多くの犠牲者が出た。火事で亡くなった人の供養のためには多くの蠟燭が必要だが、家では用意することができない。そのため、子どもに他の家をまわって蠟燭をもらってこさせたという話を昔、町の長老から聞いた。

②函館の大火¹²⁾

函館は大火が多く、亡くなった人方を慰めるためにまわった。そして、ご供養するのに物が無かったから、蠟燭を集めていたという話を母親か

ら聞いた。青森のネプタが起源とする説もあるが、子どもネプタにはあんな小さい蠟燭ではなく、もっと大きく太い蠟燭を使っていたから違うと思うし、肉親の言うことを信じたい。

③洞爺丸の沈没事故¹³⁾

この七夕行事は函館では7月7日に行うが、七飯¹⁴⁾や上磯¹⁵⁾は8月にやる。函館のお盆はシンボンの7月13日に行い、他の地域は8月のキュウボンに行くため、七夕と盆は関係がある。函館の盆がこの時期になったのは諸説がいくつかあり、青函連絡船の洞爺丸が台風で沈没した事故で、大森山に遺体が多く打ち上げられ、その遺体を火葬して綺麗にしたのがこの時期だったというものがある。蠟燭をもらうのはこの事故の被害者を供養するためではないか。

函館では、昭和9年(1934)3月21日に「函館大火」といわれる大火災が発生した。この火災では、焼失面積416.39ヘクタール、死傷者数計11,651人の被害を出した〔函館消防組 1937b : 85〕。函館は歴史的に火災が多く、①・②の語りがどの大火を指しているのかは断言できないものの、『函館大火史』には、上記被害のほか、函館大火で大門の遊郭にも延焼した記録が残されており、①・②の語りがこの災害に根ざしている可能性を示している〔函館消防組 1937a : 22〕。また、③の語りが指すのは、昭和29年(1954)9月26日に発生した青函連絡船洞爺丸を含む5隻の船の沈没事故である。死者数1400余名を出したこの海難事故では、遺体収容が難航したことが記録されている〔日本国有鉄道青函船舶鉄道管理局 1978 : 220 ; 櫻井 2002 : 804-808〕。

これらの起源には、決定的な共通点がある。供養のきっかけとなる災害や事故は、いずれも、本研究において「ローソクもらい」の習俗が史料で初めて確認される大正2年(1913)よりも後の出来事なのである。つまり、これらの語りが行事の実際の起源を伝えるものではなく、起源が忘れられた後、地域史上の悲劇的な記憶と結びつけられるという後から加えられた意味付けであると解釈できる。

こうした口承が生まれる背景として、柳田國男は「こどもが大きい人から引き継がれた行事と、単なる彼らの遊戯との境目は目に立たない。ただ年月がたって一方がもうその重要性を認めず、おいおいに起こりを忘れてしまうだけである」と指摘する〔柳田 2013b (1960) : 77〕。函館でも大人の「七夕祭」を子どもたちが遊戯として引き継ぐ過程で、本来の起源が次第に忘れられていったと考えられる。そして、その空白を埋めるように、地域の人々が共有する大きな出来事を新たな起源として設定し直すことで、行事を続けることの意義を再確認し、地域アイデンティティを強化する、そのような住民の無意識的な作業がこれらの語りを生み出した背景にあるといえる。

Ⅲ 「ローソクもらい」から「タナバタまつり」へ

1 昭和期以降の行事変遷

明治期、地域祭礼「七夕祭」の担い手となった子どもたちの間で、行事に用いる蠟燭を家々からもらい集める「ローソクもらい」の習俗が誕生した。その後、大正期に入ると祭りの形式は変化し、山車を出していたものが、笹竹に色紙や提灯を付けて練り歩く形が主流となっていった。1940年頃までは笹竹を持ち歩いていた地域があったが、次第に提灯のみを持つようになり、七夕飾りは各家の玄関先に飾られるようになった。調査では、1960年代まで、浜や川が付近にある地域において、使った七夕飾りを次の日に流して片付けたという話者が多くみられた。なお、戦時下の動向については、蛸島によって1940年代の囃子歌が記録されていることや、昭和6年(1931)生まれの函館出身者への聞き取り調査¹⁶⁾から、一部地域では途絶えることなく行事が続けられていたことが確認できる〔蛸島 1986 : 50〕。

ここから、筆者の聞き取り調査の情報に基づき、昭和期における行事の実態について述べていく。1940年代から50年代にかけての「ローソクもらい」は、新暦7月7日の夕方、薄暗くなり始める頃から、小学6年生以下の子どもたちが近隣の遊び仲間と集団を形成し、通学区域や日頃の遊びのテリトリー内の家々を訪ねて囃子歌を歌うという形態で行われていた。未就学児や低学

年は、近隣の年長者に誘われて参加するのが通例であったという。その際、女子は浴衣または着物姿で飾りのついた提灯¹⁷⁾を、男子は空き缶を加工した自作のカンテラ¹⁸⁾を携行することが多かった(図2)(図3)。このカンテラは、毎年行事の前に子どもたちが集まって製作するものであった。その際、年長者が年少者へ作り方を伝えていたという。



図2 カンテラ
八幡町会高氏による再現



図3 カンテラ
杉並町会西尾氏による再現

当日は、多くの家が玄関を開け、軒先に提灯や外灯、七夕飾りを出して子どもたちの訪問を待っていた。子どもたちは特に目印がなくとも家々を順番に訪ねて行ったといい、鍵をかけている家は外から戸を叩かれることもあった。民家では通常1本の蠟燭、商店では米屋は餅、八百屋では果物など、店の商品がもらえた。稀に蠟燭を1本以上渡す家や、太い蠟燭、色のついた蠟燭を渡す家もあり、このような家には、行事の最中に会った他グループから情報を聞いた子どもたちが押し寄せたという。蠟燭は行事最中に持っている提灯やカンテラの付け替えに使われ、行事後には、子ども同士でもらった

本数を競った後、家の仏壇や神棚への供物、停電や災害時の予備、スキー板のワックスなどに利用された。

1960年代も行事形態は同様で、子どもたちは提灯やカンテラを持って近所の家を順番に訪問した。仏壇が無い家や、高齢者一人暮らしの家では大量の蠟燭を準備できないため、金銭を渡されることもあったが、親から受け取らないように注意を受けていたという。また、蠟燭の他に、米やふかした芋をもらうこともあった。蠟燭は子どもにとって、あまり実用性のないものであったが、集めた蠟燭の数を競って遊んだり、友人と近所を堂々と練り歩いたりすることを楽しんでいて、「ローソクもらい」に参加できる年齢は厳格に定められていたわけではないが、女子は着物・浴衣の肩上げが全て取れる頃を目安に、小学6年生以降は行事に参加しなくなったという。

子どもたちが歌う囃子歌は、「竹に短冊 タナバタマツリ オーイワイヤヨ（オーイイイヤヨ）」の後に付ける歌い文句に地域性がみられ、留守の家にだけ「ローソク くれなきゃ カッチャクド¹⁹⁾」と歌う地域や、男子のみ「ローソク ケナイバ²⁰⁾ カッチャクゾ」「ローソク ケネバ カッチャクゾ」と歌う地域があった。地域によって多少の違いはあれども、囃子歌を歌わなければもらえないことは、どの地域も共通しており、数名のグループの中で歌っていない子どもがいれば、やり直しをさせられていたという。また、歌は学校や大人から習うのではなく、一緒にまわっている年長の子どもと歌うことで覚えるため、歌詞の内容を深く考えることはあまりなかったという。

1970年代になると、蠟燭と飴玉の2種類を用意する家が登場し、次第に蠟燭の代わりに飴玉のみを渡す家が増えた。また、この時期に学校から行事に参加する際の注意事項として、「お金をもらってはいけない」などと記載されたプリントが配布される地域が出始める。

1980年代には飴玉以外の駄菓子や菓子を渡す家が増え、子どもたちの持ち物も提灯やカンテラから、大量の蠟燭と菓子を入れるための袋へと変化した。子どもだけの火の使用が危険との声も挙がり、明かりを持たない子どもが増えたという。この頃には、もらった蠟燭を仏壇や神棚に供えることはなく、使い道のないまま缶に入れて保管していたという人もいた。玄関が閉まっている

家には行ってはいけないと教えられることもあったという。稀に、玄関先に「1人1個」と書かれた箆の上に菓子がまとめて置いてある家があったといい、この場合、囃子歌を歌っても家主は外に出てこないため、歌ったら箆から取って次の家へ向かった。

以上までの調査結果から、函館七夕行事の変遷は次の3段階で整理できる。第1段階では、江戸期の地域祭礼「七夕祭」が明治維新を機に衰退し、子どもが遊戯として祭礼を引き継ぐなかで、行事に必要な蠟燭を集める「ローソクもらい」の習俗が誕生する。第2段階では、子どもが行事の主体となるなかで、山車巡行など「七夕祭」の模倣という側面が薄れ、蠟燭を集める「ローソクもらい」自体が主目的となる。そして第3段階では、生活様式の変化や安全への配慮といった社会的背景から大人や学校の関与が強まり、蠟燭を伴わない「タナバタマツリ」へと変容したのである。

2 2010年代の「タナバタマツリ」

ここからは、2010年代の桔梗町において筆者が経験した「タナバタマツリ」の実態を報告する。行事当日の新暦7月7日、参加者である子どもたちは17時から20時にかけて、友人同士でグループを組み、七夕飾りを掲げた家々をまわった。小学校低学年までは保護者が同伴するが、3年生以降は子どものみのグループが保護者間の事前調整によって編成された。女子や未就学児は浴衣を着用することも多く、菓子を入れるための袋やリュックサックを携行した。学校からの指導により自転車の使用は禁じられ、徒歩での移動が原則であったため、行動範囲が普段の遊びの範囲を超えることは稀であった。しかし、巡回中に出会った他グループや保護者間の情報網（メールなど）を通じて、豪華な菓子や珍しいモノがもらえる家の情報がリアルタイムで交換され、限られた時間内で多くの良いモノを効率的に得るためのルート選定をグループ内で相談していた。

菓子を受け取る手順は次のように整理できる。まず、七夕飾りのある家を訪れ、チャイムを鳴らす。家から大人が現れると、グループ全員で「竹に短冊タナバタマツリ オーイニイワオ ローソク1本ちょうだいな」という囃子

歌を歌う。歌い終わると、1人ずつ菓子が手渡され、子どもたちは礼を述べて次の家へと向かう。大人の出迎え方は様々で、屋外で待つ家もあれば、歌の途中で奥から出てくる家もあった。大人が不在の家では、菓子を入れた箱と共に「1人1個まで」「歌ったら取ってね」といった張り紙が置かれていることがあった。この場合でも、子どもたちは家の中に向かって囃子歌を歌うという行為を省略せず、歌い終えた後に各自で菓子を取るというルールが守られていた。

子どもたちを迎える側の各家庭では、1ヶ月ほど前から準備が行われる。筆者宅では、笹をスーパーなどで購入、あるいは近隣から調達し、折り紙などで作った飾りを付け、当日の昼過ぎに玄関先の目立つ位置に飾った²¹⁾。配布する菓子は、各家庭でインターネットやスーパーなどを利用して大量に購入した。2012年に菓子以外の配布物として、スーパーボールすくいや金魚すくいを企画したところ、それが評判を呼び、翌年以降、噂を聞きつけた他地域の保護者が子どもを車で連れてくる姿もみられた。

3 近年の様子

近年の「タナバタまつり」は、学校や家庭によるルール化が進んでいる点の特徴である。七夕前になると、小学校から各家庭へプリントやメールで注意事項が伝達される。その内容は、時間（18時～20時）や場所（七夕飾りのある家のみ訪問）、作法（お礼を言う、言葉遣いに気をつける）、安全（低学年の保護者同伴、自転車禁止、食べ歩き禁止）、金銭の授受禁止など、多岐にわたる。中学校にはこの通達が行われていないことから、行事が小学生以下を対象としていることが明確化されている。これらに加え、各家庭でも移動範囲や帰宅時間を子どもの年齢に応じて定めるなど二重のルールが課される。これらのルールは、大人の罰則によってではなく、子ども同士の監視によって担保されている。聞き取り調査によると、ルールを破る子どもは他の仲間から咎められるため、子どもたちは相互監視からルールを遵守するという。これは、子どもたち自身が、行事における秩序の維持を強く意識していることの表れとも捉えられる。

令和2年(2020)以降のコロナ禍では、学校からは一斉に中止の通達がなされたが、中止の判断はあくまでも任意であり、屋外で実施される行事であることから、例年通り実施した地域もあった。その後、令和4年(2022)に学校を通じた再開許可の告知がされると、一部ではマスクを着用して参加する姿がみられた。共同学童保育所ききょうクラブでは、コロナ禍の影響で行事経験のない学童利用児童に対し、囃子歌の練習や参加する上でのルールを教える活動が行われた。

4 令和6年(2024)の様子

本節では、令和6年(2024)7月7日に行われた「タナバタまつり」のフィールドワーク調査に基づき、その実態を報告する。当日は民家や商店に加え、各町会も主体的に子どもたちのために菓子や玩具を準備していた。ここでは、調査地である青柳町会と松風町のだかし屋さきき商店での事例を中心に分析する。

青柳町会では、函館山麓の谷地頭から採集したという大笹2本が町会館入口に飾られ、駄菓子数点の詰合せとメンコや折り紙といった玩具が用意されていた。法被を着用した町会員5~6名が、訪問した子どもたちの囃子歌に手拍子をしながら耳を傾け、歌い終わると1人ずつに菓子と玩具を選ばせ、渡した。未就学児は、母親や祖母に連れられて小学校からの通達(18時~20時)より早い16時頃から訪れていた。未就学児の多くは甚平や浴衣を着用し、菓子を入れるための袋を持参していた。なかには事前に囃子歌を練習してきた子どもも見られ、保護者と町会員の手拍子に合わせて歌っていた。18時を回ると小学生のグループが多数訪れ始める。指定時間まで町会館前で待機し、時間を確認してから歌い始めるなど、ルールを厳守する様子も確認された。グループは4~7名の同学年で構成されることが多く、高学年になると保護者の同伴なしで行動していた。町内全体で、七夕飾りを掲げる家は5軒に1軒程度であり、子どものいる家庭では、母親が子に同伴し、父親が家でモノを配るという役割分業を行っているとの証言も得られた。配布物は駄菓子が主流である一方、手作りの菓子を用意するなど、各家庭が子どもたちの

訪問を心待ちにしている様子がうかがえた。

函館駅前の繁華街に位置する松風町の「だがし屋ささき商店」では、囃子歌を歌い終えた子どもにサイコロを振らせ、出た目に応じて景品を渡すというゲーム性を加えた行事を行っており、当日は17時から19時頃まで開かれた。ここでは車で移動する参加者が多く、同伴の保護者が繁華街付近に路上駐車している姿が見られた。また、中学生が弟妹の引率者となる姿も観察された。繁華街という特性上、景品も豪華になる傾向があり、高さ80センチを超える大型の玩具を持つ子どもも見られた。

こうした商業地ならでの活況に加え、近年では、行事を活用した新たな企業活動や町会活動も行われている。だがし屋ささき商店では、毎年、市内企業（株）アシスト・フクダから菓子代の寄付を受けており、店主と共に、企業社員が子どもの相手をする傍らで保護者向けに企業PRを行う姿が見られた。このような宣伝活動は令和6年（2024）が初の試みであったといい、近年の「タナバタまつり」において低学年に課される保護者同伴のルールを利用し、地元根ざす企業へのアピールをする目的があるとのことである。また、松風町の複合施設シネマ太陽では、(株)太陽グループが菓子とポップコーンを配布し、複合施設内の映画館で飲食可能とするイベントを開催した。さらに、深駒町会では行事前日の7月6日に町会活動「七夕飾り作り」を催し、高齢者から子どもへ「七夕飾り作り」の技術伝承の場および多世代交流の場を設けていた。活動には町会役員のほか、町内の回覧板から申し込んだ町内の高齢者および、子どもとその保護者が参加し、役員や高齢者が子どもに作り方を教えながら「ローソクもらい」の思い出を語る様子が見られた。

これらの事例から、現代の「タナバタまつり」が単なる子どもの行事にとどまらず、企業や地域コミュニティによる新たな活動の場としても機能し始めている実態が明らかになった。

IV 考察

1 函館七夕行事の意義

函館七夕行事と類似するアメリカの祝祭ハロウィンを分析した関口英里は、「トリック・オア・トリート」の機能の1つを「子どもに対する保護者の行動規制の緩和と、子どもの日常規範からの解放」であるとし、子どもたちのみで仮装して菓子を得ることや、悪戯をすることが公認される点が、日常における規範の留保として機能していることを指摘している [関口 2003: 129]。函館の「ローソクもらい」もこれと酷似しており、保護者の監視がない状況において、子どもたちのみで提灯やカンテラを手に、浴衣や着物で着飾り、「出せ出せ」「カッチャクゾ」といった暴力的な言葉を用いながら地域中の家々を訪れる行為が許容されていた。1960年代の「ローソクもらい」経験者は、「七夕は十五夜と同じくらい楽しみだった²²⁾」と語り、十五夜の供物盗みと「ローソクもらい」が同類の行事だと認識していた。また、1980年代経験者の「自由に人の家に行って（モノ）がもらえるし、自由に人の家に行って探検ができるという楽しみがあった」という言葉からも、大人の監視下になく、悪戯が許容される空間で、子どもたちが主体性を持って行動すること自体に「ローソクもらい」の本質的な意義が見出せる。さらに、着物の肩上げを目安に行事を卒業していたことや、中学校進学と共に「子どもっぽいやらないという感覚になる²³⁾」との証言から、それを見守る大人たちもまた、この行事を子どもから大人へと成長するための人生儀礼²⁴⁾として暗黙のうちに認識し、子どもの悪戯を許容していたと考えられる。

しかし、現代に近づくにつれ、子どもが「カッチャクゾ」という乱暴な言葉を使うことや見境なく家々を訪れる行為が許容されにくくなったことに加え、火遊びや夜遊びに対する安全意識が高まりをみせる。こうした社会的な変化を受け、学校による囃子歌の統一化、時間や同伴者の規定、訪問先の限定といったルールを設けるなど、行事への関与が始まる。調査では、提灯を燃やしてしまったという経験談や、燃やしてしまっている子どもを毎年見かけたという記

憶が多く語られた。1940年～50年代経験者が「昔は子どもが少しくらい怪我をしても大丈夫だった」と語るように、大人の干渉が強まったことが、「ローソクもらい」を「タナバタマツリ」へと変質させた最大の要因と考えられる。

この変化を子どもたちの視点から見ると、大人や学校からの干渉の強まりによって「日常規範からの解放」という意義を失い、大人が定めたルールに則ってモノを得る行為に価値を見出す「タナバタマツリ」へ移行したと考えられる。現代の「タナバタマツリ」では、不在宅でも律儀に囃子歌を歌う姿や、学校指定の時間を厳守する姿など、子どもたちが秩序を乱さないよう振る舞う様子が観察される。つまり、かつての「ローソクもらい」における意義が失われた後、子どもたちは提示されたルールを遵守して秩序を保ち、その対価としてモノを得ることに新たな意義を見出すようになったと理解できる。情報交換によって効率よく質の良いモノを獲得しようとする点は両時代に共通するが、その本質は異なる。「ローソクもらい」では、許容された逸脱行為を通じて他者より良いモノまたは多くのモノを得るといった競争の側面があったのに対し、「タナバタマツリ」では、定められたルールの下で効率よく質の良いモノを収集する楽しみに重点が置かれ、日常規範からの逸脱や競争の要素は希薄化している。

一方、大人たちの視点では、函館の子どもの人生儀礼であるという基本的な行事認識は、現代の「タナバタマツリ」においても変化していない。かつての自分が経験した行事を現在の子どもたちにも経験させたい、喜んでもらいたいという思いが、毎年多くの家庭を行事に関与させる動機となっている。しかし、子ども側の関心事がモノ自体へと移行したことで、「ローソクもらい」では、それほど重視されなかったモノの質が求められるようになった。特に民家においては、モノの内容が蠟燭から菓子や玩具などと多様化したことで、他家との差別化を図り、より多くの子どもを惹きつけようとする地域住民が登場する。大人にとっての「自己表現の場」としての機能が生まれたのである。このように趣向を凝らしたモノを用意する家が多く登場するようになったことで、行事と関連付けた企業の宣伝活動や町会活動が新たに行われるようになったと考えられる。

2 子ども行事の存続と変化のプロセス

現在の北海道では、函館以外にも七夕に子どもが地域を巡り、モノをもらう習俗が行われている。しかし近年、少子高齢化や近隣社会の希薄化といった社会構造の変化を背景に、行事の存続自体が困難になる地域も増え、各地でその衰退がみられるようになった。『総合日本民俗語彙』では、タナバタウタとして札幌地方で使われた「ローソクもらい」の囃子歌が収録されているが、2024年の調査では、札幌からの転入者が、自身の地域には行事がなかったため、動画共有サイトYouTubeで「タナバタまつり」の動画を観て事前に囃子歌を練習しているという事例がみられた²⁵⁾ [民俗学研究所編 1955: 881]。

かつて、子ども主体の行事「ローソクもらい」が道内のほぼ全域で行われていたことは、蛸島の研究で報告されており、函館以外の多くは月遅れの8月に行われていた [蛸島 1986: 52]。囃子歌に着目すると、函館の歌詞が「竹に短冊七夕祭り オーイニイワオ (オーイヤイヤヨ) ローソク1本ちょうだいな」と蠟燭の要求に特化しているのに対し、他地域では「今は豊年、たなばたまつり。ろうそく出せ、出せ。出さなきや、かつちやくぞ。おまけにくいつくぞ」、「今や豊年タナバタまつりよ ろうそく出せよ 出さなきゃかつちやくぞ おまけにくつつくぞ」と豊作祈願の文言が含まれる事例が確認できる [蛸島 1986: 52-53]。さらに佐々木の研究では、商業都市であった小樽市に「商売繁盛」という独自の歌詞が含まれていた地域が存在したことも明らかにされており、その地域の生活基盤に根差した具体的な祈願が行われていたことがわかる [佐々木 2022: 31]。また、小田嶋の報告によれば、十勝や空知地方では七夕棚を設けて初収穫の野菜を供え、「七夕には七夕の神様がいます」と明確に神格を意識した伝承が存在したという [小田嶋・山部 1991: 351]。これらの事例、すなわち祈願の言葉、具体的な供物、神格の存在は、元来の北海道の七夕行事が、ムラの豊作や繁盛を願う予祝儀礼と深く結びついていたことを強く示唆している。

この予祝儀礼としての性格は、かつての函館も同様であった。本稿2章2節で述べたように、江戸期の函館七夕は「豊年豊年」と唱える予祝儀礼を伴う行事であり、近年の調査でも行事を「タナバタサマ」と呼ぶ話者の存在や、

七夕飾りを川や浜に流していたという儀礼的な行為の経験談が複数確認された。「一サマ」という呼称は、行事そのものへの敬意と、飾りを流す行為は穢れを祓うという信仰儀礼的な観念と結びつく。これらは、福田の指摘した神聖性を有する子どもたちが、信仰の意味をもつ年中行事を担っている事例として解釈できる〔福田 1977：119〕。しかしながら、現在の函館の「タナバタマツリ」では、ムラの繁栄祈願や予祝儀礼の要素は、ほとんど残存していない。また、1980年頃の室蘭の囃子歌「ローソク出せ出せよ 出さなきヤクチャクゾ おまけに食いつくぞ ローソク出せよ²⁶⁾」や、佐々木が報告した漁村地区の事例からも、祈願の歌詞が使われなくなっていることがわかり、現代社会においては、各地で七夕行事から信仰的儀礼要素が廃されていった過程がうかがえる〔佐々木 2022：31〕。

以上の函館における七夕行事の変遷と存在意義、そして道内各地の事例を含めた分析から、子ども行事が存続していく際に起こる変化のプロセスを次のように論じることができる。まず、江戸から明治への社会変革や近代化によって、地域の信仰的儀礼を伴う地域祭礼が衰退する。その後、柳田が指摘するように、日頃から大人の行動を観察し、真似することに熱心な子どもたちが、その本質的な意味を問うことなく「遊戯」として過去の祭礼の模倣を始める〔柳田 2013a (1960)：76〕。この際、福田が述べるように、神聖な存在である子どもが儀礼を担うこと自体に、大人たちが意義を認めるという側面もあったと考えられる〔福田 1977：119〕。「ローソクもらい」では、子どもたちが蠟燭を要求して地域を巡る一連の行為に、そうした儀礼的な意味合いが見出されていたと推察される。しかし、近代化がさらに進み、信仰的儀礼の社会的必要性が薄れると、囃子歌から祈願の要素が消えていく。それでも行事が存続したのは、後援者である大人たちの行事に対する認識が、神聖な子どもたちによってムラの利益を祈願する共同体中心の「年中行事」から、子どもの成長を見守る家族中心の「人生儀礼」へと、その意味付けを転換させたからだと考えられる。共同体のための儀礼から、個々の子どものための儀礼への変化こそが、行事存続の鍵であった。そして、人生儀礼として定着していく一方で、本稿 2 章 3 節で論じたように、行事の本来の起源が忘れら

れた空白を埋めるため、地域史（大火や海難事故など）と結びつけた新たな起源が語られ始める。また、行事の変化によって大人の自己表現の場としても機能し始める。これにより、地域にとっての行事の重要性が再確認され、住民の行事存続へのモチベーションを高める上で決定的な役割を果たしているのである。

現代の函館で「タナバタマツリ」が盛んに続けられている理由は、単なる慣習に留まらない。行事を支える大人が、これを子どもの成長に必要な人生儀礼と認識していることに加え、地域アイデンティティおよび、家や個人の自己表現の場であるこの行事に参加、または積極的に関与することを通じて、自らが函館の住民であるという意識を確立させている。この構造こそが、現代における函館七夕行事の存続を支える基盤になっていると考えられる。

おわりに

本稿では、函館七夕行事を時代や形態別に「七夕祭」「ローソクもらい」「タナバタマツリ」の3つに分類し、その起源と変遷をたどることで、行事の存在意義と子ども行事が存続していく際に起こるプロセスを考察した。

調査では現在の「タナバタマツリ」に対し、「モノをもらいに行くという発想が嫌だ」「物乞いの行事だ」といった否定的な意見も確認された。その背景には、「ローソクもらい」から「タナバタマツリ」へ変化する中で、子どもの主体性が希薄になり、その認識が「悪戯や競争を楽しむ日」から単なる「モノをもらう日」へと変化したことが一因として挙げられる。加えて、現代では、行事が大人の自己表現の場としても機能し始めたことで、モノの内容が多様化したことや、保護者が子どもに同伴するようになったことで、保護者運転の自家用車で生活圏外地域を巡る子どもが増加し、商店が密集する繁華街や豪華なモノを用意する家の負担が増大するという課題も生じている。この状況は、地域のアイデンティティとして行事の存続を願う層と、負担の大きさや行事意義の変容を批判的に捉える層との間で、今後、意識の二極化が進む可能性を示唆している。

しかし、こうした課題の発生自体が、この行事が今もなお、地域社会にとって重要な存在であり続けている事を指し示している。今後、地域住民がこの二極化を乗り越えるため、どのように行事を変化させ存続させていくのか、その動向を注視する必要がある。

謝辞

本稿の執筆にあたり、青柳町会、桔梗町会、杉並町会、八幡町会、深駒町会、(株)アシスト・フクダ、共同学童保育所ききょうクラブ、(株)太陽グループ、だかし屋ささき商店、函館市市民部市民・男女共同参画課、各町内住民の皆様、函館市在住の北村氏、堀氏、並びに筆者父母に多大なる調査のご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

注

- 1) 本研究では、現在の函館市内において「ローソクもらい」「タナバタまつり」の習俗が存在する2004年合併前の市域（現在の東部地区を除いた市域）を対象とし、令和6年（2024）に調査を実施した。そのため、ここでは「函館市」という表記を避け、「函館」という表記を用いた。
- 2) 本稿では、「子ども」の定義を函館七夕行事の対象年齢である未就学児～小学生（3～12歳頃）とする。
- 3) 一部同音記号等の表記を改めた [内田編 1953 : 162]。
- 4) 『菅江真澄事典』『眠流し（ねむりながし）』の項目を参照 [稲 2023 : 247-248]。
- 5) 『函館市史 錢亀沢編』を参照 [外崎 1998 : 478-479]。
- 6) 一部同音記号等の表記を改めた [吉田 1966 : 235-236]。
- 7) 一部同音記号等の表記を改めた [平尾著・森山校訂 1974 : 185]。
- 8) 「今夜の七夕祭り」「函館毎日新聞」1913年8月8日朝刊、3面、一部同音記号等の表記を改めた。
- 9) 「きょう七夕」『函館新聞』1886年8月7日、一部同音記号等の表記を改めた。
- 10) 昭和25年（1950）生、令和6年（2024）7月函館市深駒町にて聞き取り。
- 11) 現在の函館市大森町に位置した「大森遊郭」のことを指すと推定される。
- 12) 昭和30年（1955）生、令和6年（2024）5月函館市深駒町にて聞き取り。
- 13) 昭和30年（1955）生、令和6年（2024）4月函館市杉並町にて聞き取り。
- 14) 函館市の隣町である北海道七飯町を指す。
- 15) 函館市の隣町である北斗市上磯町を指す。

- 16) 昭和 6 年 (1931) 生、令和 6 年 (2024) 7 月函館市深駒町にて聞き取り。
- 17) 手持ちサイズの小さな提灯。グラデーションが描かれたものや金魚の形をしたものなど、様々な色、形の提灯が使われていた。駄菓子屋や八百屋、「一銭ミセヤ」という子供が一銭で買い物ができる商店などで販売されていたという。
- 18) 空き缶に針金で持ち手を付け、内部に蠟燭を立てた携帯用照明器具。図 2・3 参照。
- 19) 「引っ搔くぞ」の意味。
- 20) 「くれなければ」の意味。
- 21) 筆者母への聞き取り。母は函館出身者ではないため、転入するまで函館七夕行事の習俗を把握していなかった。そのため、行事前に近隣住民や他の保護者から情報を得て、子どもを迎える準備を行ったという。
- 22) 十五夜の日に家の裏の戸を開けておくと、子どもたちは団子やナス、ススキなどの飾ってある供物を盗んで食べていた。
- 23) 昭和 25 年 (1950) 生、昭和 30 年 (1955) 生、昭和 32 年 (1957) 生、令和 6 年 (2024) 5 月函館市深駒町にて聞き取り。
- 24) 本稿で用いる「人生儀礼」と「通過儀礼」の概念について及川は、アルノルト・ファン・ヘネップが提唱した「通過儀礼」を、「各種の『通過』による属性の更新や賦活性を分析する枠組」と説明し、その構造に「分離」「過渡」「統合」という 3 つの局面を設定する [及川 2020: 4]。一方、「人生儀礼」はより広義に、「人びとが自他の人びとのライフステージを意識して執行する儀礼」として位置づけられる [及川 2020: 20]。
これらの概念を函館七夕行事に適用すると、まず、この行事が幼稚園児から小学生までという特定のライフステージにおいて執行される点で「人生儀礼」としての性格を持つことは明らかである。しかし、これを厳密な意味での「通過儀礼」と見なすことには慎重な判断が求められる。行事の体験には、日常や親元から離れる「分離」の局面や、逸脱行為が許される存在へと一時的に変化する「過渡」の局面は明確に認められるものの、最終段階である「統合」の局面が曖昧だからである。子どもたちは毎年この儀礼を繰り返すが、それによって「子ども」から「大人」へと社会的地位が移行するわけではない。その移行（統合）が意識されるのは、小学校卒業と共にこの行事からも「卒業」する、その一度きりである。
以上の理由から、本稿ではこの行事が持つ通過儀礼的な性格を認めつつも、その全体像をよりの確に捉えるため、主に「人生儀礼」という用語を用いて分析を進めることとしたい。
- 25) 令和 6 年度の小学校入学前に札幌から函館へ転入した子ども及び、その保護者への聞き取り。転入前に住んでいた札幌では「タナバタまつり」の習俗がなく、行事の存在を知らなかったため、行事当日に歌えるよう YouTube で囃子歌を検索し、歌う練習をしていたという。
- 26) 昭和 47 年 (1972) 生、筆者父への聞き取り。

参考文献

飯島吉晴

1991 『子供の民俗学：子供はどこから来たのか』 新曜社

稲雄次

2023 『菅江真澄事典』 無明舎出版

内田武志編

1953 「蝦夷のてふり 後篇」『菅江真澄未刊文献集 第1』（常民文化研究 第65）日本常民文化研究所

及川祥平

2020 「『人生儀礼』考：現代世相への対応に向けて」『成城文藝』（254）

小田嶋政子

1999 「北海道の子供たちのローソクもらいというのはどんな行事か」新谷尚紀編『民俗学がわかる事典：読む・知る・愉しむ』日本実業出版社

小田嶋政子・山部秀子

1991 「年中行事」『北海道を探る（22）』北海道みんぞく文化研究会

川田耕

2021 「子どもたちの七夕祭：その歴史と心性」『京都先端科学大学経済経営学部 論集』（2）

櫻井健治

2002 「41 洞爺丸台風の悲劇 タイタニック号に次ぐ海難事故」函館市史編さん室編『函館市史通説編 第4巻 第7編』函館市

佐々木優香

2022 「『ローソクもらい』の囃子歌に見られる伝承過程について：小樽の事例をもとに」『小樽市総合博物館紀要』（35）

史乃琛

2023 「七夕に関する一考察：『竹飾りの由来』を中心に」『国際日本学研究論集』（17）

関口英里

2003 「エンターテイメントとしての祝祭空間：ハロウィン分析を通して見るアメリカ社会」『同志社女子大学学術研究年報』54（1）

外崎純一

1998 「津軽海峽域における民俗の特色」函館市史編さん室編『函館市史 銭亀沢編』函館市

竹内利美

1957 「子供組について」『民族学研究』21（4）

蛸島直

1986 「ローソク出せ出せよ：民俗のひとり歩き」『日本民俗学』（166）

田中宣一

1983 「七夕まつりの原像」日本民俗研究大系編集委員会編『日本民俗研究大系第三巻 周期伝承』
國學院大學

日本国有鉄道青函船舶鉄道管理局

1978 『航跡 青函連絡船七〇年のあゆみ』青函船舶鉄道管理局

函館市

2012 『函館市都市計画マスタープラン 2011-2030』函館市都市建設部都市計画課

函館市

2024 「函館市 町別人口表 令和6年(2024年)」https://www.city.hakodate.hokkaido.jp/docs/2015020600084/file_contents/tyoubetsuR6.xls (2025年10月16日最終閲覧)

函館市

2025 「函館市の概要」https://www.city.hakodate.hokkaido.jp/docs/2014020600063/file_contents/R7gaiyou.pdf (2025年10月16日最終閲覧)

函館消防組

1937a 「消防各部隊防禦行動報告抄録」函館消防本部編『函館大火史』函館消防本部

函館消防組

1937b 「函館大火に関する参考諸統計」函館消防本部編『函館大火史』函館消防本部

平尾魯僊

1969 『箱館夷人談』(郷土資料複製叢書 9)、市立函館図書館

平尾魯僊著・森山泰太郎校訂

1974 『洋夷茗話・箱館紀行』(生活の古典双書 12)、八坂書房

福田アジオ

1977 「子ども組とムラの教育」菅原道彦著『子ども組』国書刊行会

民俗学研究所編

1955 『総合日本民俗語彙 第二巻』平凡社

柳田国男

2013a (1960) 「こども風土記」『小さき者の声 柳田国男傑作選』角川文庫

柳田国男

2013b (1960) 「小さき者の声」『小さき者の声 柳田国男傑作選』角川文庫

山崎福太郎

2013 「函館市の七夕行事『ローソクもらい』の実態」信州大学教育学部自然地理学研究室編
『2011年度地理学野外実習報告書Ⅳ 函館』国立大学法人信州大学教育学部自然地理学研究室

吉田武三

1966 『増補松浦武四郎 本編』松浦武四郎伝刊行会